

7.28 原発・エネルギー問題 近畿・福井交流会議の報告③ 討論から

「意見広告ポスター」で対話と共同広げる 滋賀湖南地区・山岡光広甲賀市議

原発問題での対話と共同の取り組みについて発言します。まず、これをご覧ください(右)。湖南地区委員会が独自に作成した「原発意見ポスター」です。「原発から自然エネルギーへ」と大きく書かれたこのポスターには1,060人のお名前が掲載されています。趣旨に賛同し、一口500円の協力金を寄せていただいた方々です。

湖南地区では、5月22日に福井原発研修バスツアーを企画しました。日曜版に折り込んだら、すぐに55名の定員が満員に。研修ツアーでは、敦賀原電のオフサイトセンターで、原子力安全保安院や敦賀市役所の職員からも説明を受け、美浜原発、もんじゅのPR館も訪れました。事故から2ヵ月余で深刻な事態が続いているにもかかわらず、いまなお「安全神話」にどっぷりとつかり、「福井では同様事故は起こらないもの」と言い切る原子力安全・保安院の発言にはあ然としました。また敦賀市からの説明では、財政的にも原発に依存しており、市民のいのちと暮らしを守る立場から、「安全神話」と決別する、という立場に立ちきれない対応が目立ちました。

■「何かしなければ」の思いに伝えよう バスツアー後、引き続き原発問題をどう取り組んでいくのか、と地区常任委員会で議論するなかで、「原発依存のエネルギー政策から自然エネルギーへの転換」の世論と運動を大きく広げる必要がある。しかも、いま多くの国民は、見えない放射能に不安をもち、これまで安全神話のもとで見えなかった原発の危険を目の当たりにして、いま何かしなければ…と思っている。でもどうすればいいのか、と悩んでいる。そういう人たちと大いに対話し、自ら500円の協力金を払って名前を掲載する人を1000人組織して「意見ポスター」をつくらうということになったのです。

取り組みは、わずか半月余りでした。日曜版に折り込み、集金に行ったら、「原発はあかん、何かせんとあかん」と思っていたと、待ち構えたかのように、ポスターの申込書を寄せていただく方もおられました。また党外の方が、「私の友達にも声をかけます」といって3人、5人と。10口していただいた人もおられました。「10口でも、1口でも、大きさも同じ、ゴシックにもならないし、赤の名前でもなりませんよ」とお断りしましたが、そのことを了解したうえで、協力金を寄せていただきました。「協力はするけれど、ちょっと名前はなあ…」と、愛犬の名前を書かれた人が、「いややっぱり自分の意志やから自分の名前をお願いします」とおっしゃった方もおられます。犬や猫の名前もちょっとだけですが、書いています。別に、猫が協力金を払ってくれたわけではありませんが、福島原発事故の影響を受けているのは人間だけではない、牛も豚も犬も猫も、生あるものすべてが、汚染され困っているだけに、その思いを込めてという方もおられます。

地区では、2100枚印刷しました。賛同者にはお礼状を添えて、自分の部屋に張るのもよし、玄関に張るのもよし、と一枚ずついま、お渡ししています。近くの宮司さんが家族で賛同していただいたので、完成したポスターをもっていきましたら、「ここに張っておきましょうか」と、神社の境内にある掲示板に2枚も張っていただきました。協力金は、60万450円寄せられました。印刷経費を除いた20万円は、原発被災地・福島に、ポスターと一緒に届けます。

市議選を控える守山で、市民要求アンケートを実施したら、原発は「廃止すべき」が23%、「段階的廃止」が35%、「見直すべき」の26%を含めると、85%の人が、原発のあり方を真剣に考えています。「これまで通り推進すべき」と回答したのは、わずか1%でした。

■賛同者に「つどい」お誘い いま原発問題をテーマに対話し、語り合うことは、日本の政治のゆがみを大元からたたく、たたかいでもあります。原発意見ポスターに協力していただいた人々を力に、「つどい」を開催し、また大きな輪を広げていく、そういうつながりとして、ポスターを生かしていきたいと考えています。そしてそのなかで、党勢拡大にも大いにつなげていく必要があります。敦賀の山本市議を招いた支部の原発学習会に参加した31歳の女性が昨日入党されました。1060人のうち半数以上は大衆です。ですから大いに入党を働きかけ、「しんぶん赤旗」の購読を訴える活動につなげていきたいと思ひます。

最後に、震災以降に発足した「あすのわ」というグループがあるのですが、原発問題で若い女性の方々、子どもをもちお母さんらが中心になって、メーリングリストに登録すると、一日平均20通から30通くらい原発問題の情報が届きます。いま大事なことは、こういう人たちとも連帯して、原発撤退への取り組みを広げていくことだと思ひます。



今に生きる40年前の原発建設阻止のたたかい 兵庫但馬地区・中家貞男(竹浦昭男養父市議代読)

■「よく食い止めてくれた」東北大震災、福島原発の重大事故の数日後、私の家や党事務所に電話がかかり、香住下ノ浜原発計画を食い止めた香住(合併して香美町)の谷口議員の街宣中に近寄ってきて激励してくれました。それは「何十年も前に久美浜原発建設に反対して、日本共産党が頑張ってくれて私たちは逃げないで助かった」「下ノ浜原発のとき、京大の先生の話聞いた。よく食い止めてくれた」という激励でした。

豊岡市議団長の安治川議員が、当時政策委員長や衆議院5区の候補者であった私をインタビューして「日本海岸・但馬・丹後の原発計画をくい止めた40年間の運動に学ぼう」とのテーマで但馬民報(上)を作成し、赤旗号外、原発特集号とセットして全戸配布しました。その影響は大きく、なかには神戸から「インターネットで但馬民報を見た。但馬で40年前にこんな運動があったと初めて知った」と電話がかかってきました。但馬民報を読んでいただいたら、関西電力が兵庫県や京都府の日本海側を火力発電、原子力発電の基地にしようとして執拗に計画的に狙っていたことがよく分かります。

■朝日が「なぜ兵庫に原発がないのか」と取材 6月中旬に朝日新聞の神戸支局の記者が私を取材に来ました。ねらいの1つは「兵庫県は日本の縮図で何でもあるが原発だけはない。なぜだろうか。もう1つは当時衆院兵庫5区の得票は3%しかなかったが、どうしてこんな大きな運動になったのか」の2点でした。ここでは香住下ノ浜原発についてももう少し詳しく述べます。

■香住下ノ浜のたたかいの教訓 香住町下ノ浜は半農半漁の約190戸の村ですが、戦後の非常に早い時期に今でいう「村おこし」で、鳥取県の20世紀梨の栽培方法を現地学んできて、村の山側に20世紀梨畑をふやし、海の砂浜を海水浴場につくりかえて観光客を呼び、そのお客さんを泊める民宿村となりました。その海水浴場へ原発をつくろうと関電が計画し、町は1965年「原子力発電所誘致対策委員会」を発足させていました。67年11月兵庫県と香住町当局は原子力発電所誘致を発表しました。70年9月議会で共産党の有田議員の質問に答えて町長が原発を事実上、棚上げする答弁を行うまで約5年間のたたかいでした。

第1は、下ノ浜にとって原発反対のたたかいはくらしと命を守るたたかいであったことです。戦後早くから過疎と貧困から脱出しようと、さまざまな工夫をこらすすめてきた村のリーダーたちにとっても、梨や民宿でくらしを立ててきた多数の住民にとっても、原発はくらしと命を奪うものでした。

第2は、学習運動でした。県知事と町当局の原発設置が発表された67年11月から1ヵ月後に京大・玉垣良三助教授、兵庫原水協・福島市郎事務局長による講演会を開催し、200人以上が集まりました。安全神話を破る第一歩でした。村では役員会、婦人会などが何回も学習し、「原発の恐ろしさ」について自分で語るようにしようと頑張りました。香住町内の各部落に出かけて座談会を開き語り部の役割を果たしました。これは決定的な役割を果たしました。

第3は、労働組合や市民との共闘です。当時の社会党の衆院議員は原子力の平和利用の立場から原発にはあいまいな立場をとっていましたが、物価値上げ反対とも結んで但馬地方労働組合協議会と原発設置反対集会を香住町で開き300名以上が集まりました。

第4は、権力の挑発や関電の買収や脅しに乗らず、住民が強く団結してすすんだことです。この村には自民党の町議が2人、1人は総代としてまた町会議長として反対を貫きリーダーの役割を果たした吉川正夫さん。もう1人は原発賛成派でした。村に2人の議員がいる場合、2つに割れることが多いのですが、賛成派を孤立させ、最後まで団結を保ちました。県当局の建設予定地の測量強行に対しても恐れず、バリケードを組み阻止し、数名の逮捕者を出しても後に引きませんでした。最終段階では香住から約100名の住民が豊岡に来て、駅前から関電営業所までデモ行進し、断固反対する決議を申し入れました。

■「学習・共闘・団結」がたたかいの土台 1960年代から70年代にかけて、日本の国民は安保反対のたたかい、労働者階級は三池闘争、市民は四日市など大気汚染反対闘争、オイルショックをえて物価値上げ反対のたたかいを体験し、太平洋ベルト地帯には一連の革新自治体を生みだし、72年の総選挙では日本共産党38名を当選させる躍進をとげました。下ノ浜の原発反対闘争はまさに「住民が主人公」の運動であり、私たちは後押ししたにすぎませんが、60年代から70年代にかけての日本国民の歴史的なたたかいの土台となった「学習・共闘・団結」はこの住民運動のなかに生かされています。

大震災・原発事故を契機に日本の政治はこれでよいのかを問う国民的探究が高まっています。「原発からの撤退」の一点で広い共同をつくりあげていくことを成功するならば、「2つの異常」をただす綱領路線への共感、信頼を発展させることができます。これに確信をもって、たたかいを前進させましょう。



日本海岸の原発計画
くいとめた40年間の運動に学ぼう

但馬民報